

社会福祉学研究科博士前期課程修士論文要旨 (2005年度)

の差がはっきりとでてしまったかもしれない。言語によらない調査の検討も必要である。そして、今回の調査では特定の適応指導教室での全体像を大まかに見渡したに過ぎない。どのようなことがその場で起こっているのかということに焦点をあてているため、具体的な支援方法や適応指導教室による変化のプロセスといったことまでは検討できなかった。より実践的に適応指導教室が活用されるためには、そういった研究がますます必要となってくるであろう。

今 洋子：共感疲労に関する一研究 (A Study of Compassion Fatigue)

本研究の目的は、Figley (1995) や Figley & Stamm (in press) による心理セラピストのための共感疲労自記式テストとホフマン (菊池・二宮訳、2001) の共感バイアスの考え方に基いて、共感疲労を測定する多面的対人感情尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検証すること、および、共感疲労・共感的苦痛・個人的苦痛・共感の過剰喚起の4つの概念の関係について検討することであった。

多面的対人感情尺度の項目作成および尺度の信頼性を検討するために、大学生計121名に調査を実施した。因子分析により3因子が抽出され、そのうち両極性の因子であった第Ⅰ因子から正の負荷を示す項目と負の負荷を示す項目とを別々に取り上げ、全体で4つの下位尺度 (各5項目ずつ合計20項目) でこの尺度を構成した。また、Cronbachの α 係数を算出したところ、十分な信頼性 (内部一貫性) があることが確認された。

多面的対人感情尺度の妥当性を検討するために、自己意識的感情尺度・対人的反応性指標との相関を分析した。得られた結果は、この尺度がおおむね妥当であることを示した。また、消防士を仮想状況の主人公にした版を作成し、看護場面版との相関関係を検討した。この2つの版の相関から、場面が違ってもある程度の安定性があることが示された。さらに、現場で働く看護師を対象に調査を実施し、仮想状況に似た体験の有無による比較、臨床経験年数による比較、大学生 (女子) との比較を行った。その結果、共感の過剰喚起で学生の方が高い得点を示した。学生よりも現場で働く看護師の方が、また、経験年数が長い方が個人的苦痛の感情を上手に処理できるようになるという傾向があった。4つの概念の関係について本研究から見出されたことは、個人的苦痛と共感の過剰喚起が強い正の関係にあること、また、共感的疲労と共感的苦痛は負の関係にあることが示された。

多田 匠：精神障害者のストレスについての語り (Talking about Stress in Couch Case)

精神障害者にとって、ストレスは社会復帰において重要な就労などの阻害要因や再発の要因にもなりうる。精神障害者施設での関わりを通して精神障害者の感じるストレスと健常者の捉えるストレスの感じ方とは質が異なるように感じた。

本研究ではストレス発生のメカニズムやストレスの生物・心理・社会的概念というより、実際に精神障害者がストレスという言葉をどのように受け止め、どのように使っているのかを面接法を用いて調査をした。

調査は2月から3月にかけて行った。調査対象者は保健所のデイケアに通う人で統合失調症13名、持続性感情障害1名、計14名であった。面接方法は個別面接及びグループ面接による非構造化面接。個別面接は一人約20分、グループ面接は約40分であった。

グラウンデッド・セオリーによる分析により「闘病体験」「現在の状況」「服薬」「身体疾患」「対処法」「就労」「家族関係」「天気・気候」「対人関係」「福祉的機能構造」10のカテゴリーが得られた。また、最終的に時間・空間の2軸により概念枠組みを形成した。

村井香里：青年における「親になることへの準備性」の検討 (Examination of Readiness Toward Parenthood in Adolescence)

本論文は、現代青年の親になることへの準備性について、主に村井則子らによる予期的育児態度調査 (1997) の追調査を通して検討し、10年が経過した今日の、青年の親になることへの準備性についてその変容を捉えるとともに、次世代育成支援事業へ生かしていくためにはどのような方策が必要であるのかを考察することを目的として行われた。

多様な学生への調査の実施では、これまで育児に対して楽観的であると捉えられてきた男性の、育児をする立場に向けた不安が明らかとなった。と、同時に伝統的性役割観から一歩抜け出し、これまで低かった女性の性役割とされてきた育児に対して自分も携わろうとする意欲も僅かではあるが増加していることが見出された。

一方で、女性は以前の自らの性に関する受容の低さが変わり、男性と同程度の受容を示していた。全体に男女の間で有意な差が見られる項目もそう見られなかったことから、これまで女性がとらわれていたとされる伝統的性役割観のしぼりは薄くなり、男女の親になることへの準備性はさらにその差が縮まっているといえるのではなかろうか。

青年たちにおける親になることへの準備性に対して、今後求められることとして、青年期までの乳幼児への世話経験の不足と親になることへの自信欠如へのサポートが挙げられる。家族の形態が著しく変化を遂げている現代、次世代を育成する存在としての青年たちにおける親になることへの準備性を育てるための経験の場や手本となる存在が求められているだろう。

劉 倫銑：肯定的経験を語ることがその経験に及ぼす影響 (Effects of Talking about Positive Experiences)

この研究はソリューション・フォーカスト・アプローチの「初回面接公式課題」という観察課題をもとに、肯定的経験を語ることがその経験に及ぼす影響について調べることが目的であった。ポジティブな経験の聞き手がいることにより、その経験の受け止め方がどのように変容するのか調査を試みたのである。調査は全部で4回実施された。予備調査では調査の形式を決めるために、二種類のインタビュー面接を行った。本調査では二つの調査を行った。これらの調査から肯定的経験を記録する場面と、実際に語る場面とを比較した。その結果、ポジティブな経験は記録したものに比べてより具体的に語られることが明らかになった。また、

語りにおいては、感情の言葉が多くなることが分かった。これは聞き手が入ることによって、話し手が話題を共有したいと思ったためであると考えられる。また、この課題は、課題遂行者に対して今までの生活を見直すきっかけを与える働きをもっているが、そこに聞き手が加わることで、さらに経験の意味づけを探ったり、そこから連想するものを語ったりすることになり、経

験が深みや広がりを増すことになっている例が散見された。

今回の研究では、各調査の条件が異なっていたため、一般性にかける部分があり、聞き手の力量の問題も孕んでいるが、初回面接公式の効用についてそのメカニズムの一端を明らかにすることが出来た。